

「無」ということ 群馬県桐生市

桐生はいろいろな面で対比が面白いまちである。東武桐生線の桐生駅からまちの中心部へ向かうと、程なく両岸が緑豊かな渡良瀬川を渡ることになるが、その前方の坂の下には絹織物、機械金属で発展した近代産業のまちが広がっている。そしてその背後には山々の連なりが見渡せる。中心の近代産業と周辺の自然との対比（そしてその調和的な風景）がまずは印象的である。昭和のはじめまではまちの中にも水路が幾筋も流れていたというが、今は周辺にわずかに残るだけである。その周辺と中心との対比も面白い。渡良瀬川周辺の路地には水路が見られるが、JR 桐生駅近くの「コロンバス通り」には欄干だけが残されている。JR 桐生駅の南側には宇宙船を思わせる巨大な円盤を頂いた「桐生市市民文化会館」の大きな建物があるが（1997年開館、坂倉建築研究所設計）、その近くを小さな惣菜宅配車がのろのろと走り、お年寄りがとぼとぼと買いに出てきている光景にも対比の面白さを感じる。桐生では他のまちでは対立しがちな様々なものが調和的に存在し

ているように感じられる。

JR 桐生駅の北側から本町通りに入ると、そこは都市計画事業で拡幅された道路になっている。沿道建物の多くは建て替えられて近代的なものになっているが、桐生信用金庫本町支店、「アートホール鉾座」、本町3丁目商店街振興組合のコミュニティホール「トポス」など特徴的な建築もある。一方、鰻屋「泉新」の建物（昭和初期の建築）のように曳き家して残された古い建築もある。

本町通りは3丁目から2丁目に入るところでいきなり狭くなる。地元が拡幅反対であったためだが、その結果、同じ通りで広狭の比較ができる。本町3・4丁目では歩道を安心して歩けるが、両側のまちは道路で分断されているように見える。本町1・2丁目では横を疾走する自動車に危険を感じるが、道の反対側にいる人とは何とか立ち話ができ、まちがつながっている印象がある。

いきなり道が狭くなる本町2丁目交差点に蔵8棟と店舗から成る「有鄰館」がある。これら



本町3・4丁目のまちなみ

2007年7月撮影（以下同じ）



本町1・2丁目のまちなみ

は矢野商店の所有により酒、味噌、醤油等の醸造・販売に用いられていたものであるが、一部店舗等を除き市に寄贈されて1994年に市指定重要文化財となり、現在は多目的イベントスペース（アート展、コンサート、演劇等）として活用されている。興味深いのは「有鄰」の名称である。これはかつて矢野商店の醤油・酒のブランド名でもあったが、その由来は孔子の「徳孤ならず必ず鄰あり」の言葉にあるとのことである。

さて、桐生は絹織物のまちとして有名であるが（「西の西陣、東の桐生」と言われた）、その産業を支えたノコギリ屋根の工場が本町1・2丁目を中心に数多く残されている。野口三郎氏が丸4年かけて行った調査では2000年1月時点で300棟以上確認されたが（同氏は戦後最盛期は約500棟あったと推測している）、2004年度に実施された「全国都市再生モデル調査」では237棟の残存に加え新たに4棟が確認され、合計241棟となった。傾向的に減少してきているが、棟数はいまだ全国一であると考えられて

いる（世界一とも言われる）。また、ノコギリ屋根工場以外にも本町1・2丁目地区には古い建築がよく残されており、また、「近江辻子」などの路地の趣もよく保全されている。

町の風景がよく残されている背景には、長い間の桐生市文化財保護課の地道な努力があった。また、道路拡幅に反対して地元住民が立ち上げた「本一・本二まちづくりの会」の活動や、様々な取り組みを積極的に行ってきた桐生商工会議所の活動などがあった。

「本一・本二まちづくりの会」は2000年に発足し、2001年度以降「まちうち再生総合支援事業」（県）により「寄合所しんまちさろん」の開設、ロゴマーク、布のれん、まち歩きマップの作成、まちなみ&まちづくりマイスター養成講座、桐生新町まちづくり塾の実施などを行ってきた。2003年には住民調査を実施して約7割が道路拡幅に反対であることを確認した。

「本一・本二まちづくりの会」はまちなみの保全を確実なものとするため、2005年度に「桐生新町まちづくり構想」（最終版2006年3月）



「有鄰館」



「近江辻子」（通称「酒屋小路」）

を策定した。これは「地区住民による“住民提案型”まちづくりマスタープラン」として策定したものであり、地区の将来像として「地域に根ざした商店と、ものづくりを行う地場産業の店舗、工房が地区全体に散らばり、来訪者が街の魅力を楽しめるまち」など4項目を掲げ、優先事項として「桐生新町歴史的町並み保存構想」（「重要伝統的建造物群保存地区」選定に向けた取り組み）、「コミュニティ往来（空間）構想」（歩行者・自転車が安全で安心して「使える往来」に改善）、「まちなかキャンパス構想」（群馬大学工学部とこの地区が一体となる街とするために、大学機能の一部や大学と連携した起業の拠点施設を、歴史的建造物等の資産を活用して地区全体を「まちなかキャンパス」とする）の3構想を掲げている。

一方、桐生商工会議所は1994年に「桐生市におけるファッションタウンのあり方を求めて」と題するビジョンを策定した。これは同市が日本ファッションタウン協会（通商産業省所管）から全国初のモデル地域に指定されて検討

した成果をまとめたものである。同ビジョンは基本的コンセプトを「産業と自然、教育と文化に育まれたファッションタウン・桐生の創造」とし、次の3項目を提示した。

織都桐生が育んだ歴史、文化、風土を生かしたファッションと市空間の創造

桐生が内在する諸々の資源の整合化とシステムの再構築

生活文化都市・桐生を支える多彩な人材の育成

「ファッションタウン」形成とは、「地域産業の高度な融合によるまちづくり」であり、「地域が、地域にある産業の発展を図りつつ、その地域の歴史・文化・観光資源との融合及び消費地との直結による新しい経済活動創出を図り、新しいファッション情報発信基地、生活文化都市としての総合的なまちづくりにより、産業と地域の活性化を図ろうとするもの」である。

桐生商工会議所はその後、シンポジウム、講演会、写真展、ファッションウィーク等を開催し、1997年度に内部に「ファッションタウン



本町通りの西側の道

（実業家、教育者、学者などが多く住んだ界隈）



群馬大学工学部同窓記念会館

桐生推進協議会」を設立した。そして1998年度に「桐生ファッション大賞」を創設した。その背景には、「人々の個性あふれるライフスタイルが、地域の産業や環境を大きく左右する時代がやって来ている」ことから、「桐生独自の生活文化を復興し、あるいは新たな要素を取り入れて創造していくことは、ファッションタウン桐生実現の大きなポイント」になるとの認識があった。これまで骨董品コレクター、「買場紗綾市」(青空市) 横振り刺繍作家等、多彩な人物、グループ、あるいは活動が毎年選ばれてきている。

「ファッションタウン桐生推進協議会」は1999年に「一店一作家運動」を開始した(現在は「一店一作家一工場運動」に発展)。これは、「作り手と売り手が共同して店舗空間を演出する機会を作り、消費者にとって癒しや感動を感じることが出来る楽しさあふれる商店街を形成」することを目的とするもので、協力店は現在約20店舗になっている。

また、協議会は2000年度に「わがまち風景

賞」を創設した。同賞は「桐生市の個性あるまち風景を形成している建造物や空間等のうち、特に良質な風景を創出しているものを表彰し、まちなみの保存と活用、ならびに市民の都市風景に対する意識の高揚に寄与すること」を目的とするもので、これまで数多くの工場、住宅、美術館、アトリエ等が賞状・プレートを贈られている(なお、協議会は、「同時に、特に良質な都市風景を損なうものについてはそれを指摘し、改善を要望して、ともに桐生のまちづくりに貢献していきたい」とも述べている)。

協議会は2004年度に内部に専門委員会を設け先述の「全国都市再生モデル調査」を実施したが、確認できた241棟のノコギリ屋根工場のうちヒアリングできた190棟については、74.2パーセントの所有者が「このまま残したい」と回答した。「活用に向けての環境は整っている」と専門委員会は判断した。

そこで専門委員会は、文化・芸術活動の創造の場としての活用、地場産業の技術伝承の新たな苗床としての活用、産業観光の核とし



「旧曽我織物新工場」



「旧斎憲テキスタイル工場」

での活用、の3つを提言した。

ノコギリ屋根工場の活用に関しては、「ファッションタウン桐生推進協議会」運営委員会委員長の北川紘一郎氏が、仮に200の工場の一つひとつに5人の創作者が入ればあわせて1,000人になり、それらの人々がネットワークをつくれば桐生は21世紀型の一大創造都市になる、桐生は工場を活用して創作者のまちになる、と語る。その先駆的な取り組みの場が、北川氏が所有者であり館長である「無鄰館」(旧北川織物工場)である。

「無鄰館」は2004年度の「わがまち風景賞」に選ばれているのであるが、その解説によれば、「無鄰館」では彫刻家、画家、服飾デザイナー、建築家、ハーブ研究家、ヴァイオリン製作者など多彩なアーティストが活動する“芸術家集団工場”を形成しており、桐生の歴史遺産が知的産業に活用されて蘇るとともに企業誘致を超える未来に向けた地域発ルネッサンス波動を希求したユニークな活動が展開されている。建築家は北川氏ご自身であり、ハーブ研究家は

北川氏の奥様である。北川氏が建物内外の設計を奥様のご希望も踏まえながら行い、奥様が中庭のハーブ園を創られているとのことである。

北川氏は、「無鄰館」の意義は創造にあるので、アーティストに限らず創造的な仕事をする人であれば分野を問わず入ってきてもらいたいと考えている。また、世界中の人々に来てほしいとも考えている。今やまちづくりは、そのまちの人たちだけで行う時代ではなく、広く外から受け入れることが大切だとの思いがその背景にある。これまではイギリスから短期間入った人がいたそうであるが、北川氏はこれからインターネットと紙媒体とを用いておおいに宣伝していきたいと考えている。国内では近いところでは群馬県伊勢崎市の人が、遠いところでは熊本県の人が入っている。

北川氏はテナントが新しく来るたびに工場の内部に壁を設けて空間を分けてきている。北川氏が工場(大正5年築)を活かし続けるのは、単に壊すのはもったいないからということではなく、古いものにしかない価値があるからと



「無鄰館」



内部の様子の一例

(ハーブ&ポプリ「ハーベンダー」入口(左))

いう思いによる。この点に関しては、入居したアーティストの人が、この工場は独特のオーラを発しており、この工場と対峙して創作することにより創造力が刺激されると話しているそうである。工場と対峙することは体力を要するが、それで創造する力を工場からもらっているとも話しているという。この話に関して建築家である北川氏は、古い建築は今の人に大きな影響を及ぼすだけの力を持っている、それでアーティストも創造力を刺激される、桐生のノコギリ屋根の工場はそのような素晴らしい建築だと思う、と述べている。すなわち、新しいものの中には建築家の自己満足でしかないものが多く、後に残るべき価値のあるものが少ない、ということであり、これはまちづくりに関して示唆するところが大きいように思われる。一方、古いものはその価値がわかる者が大切に使うてこそ残せるということであるから、この点もまちづくりに対して示唆するところが大きい。

「無鄰館」の内部空間は実に気持ちよく設計

されている。明暗のメリハリ、高低のメリハリが空間に心地よいリズムを与えている。その空間は暖かく、時に厳しいものであるに違いない。また、建物の内部空間と中庭（すなわち人工と自然）は緩やかにつながっている。建物から中庭に出るとハーブ園の緑がまぶしく、その庭に向かって椅子とテーブルが置かれたテラスが設けられている。そのテラスで楽しい一時を過ごすことも多いという。

さて、ここで桐生市を採り上げたのは、本書が冒頭から念頭に置いてきた問いに対するこたえが「無鄰館」にあるように思えるからである。つまり、まちづくりの根本の課題を解決する力が「無」にあるのではないかと。その「無」は、「有」に敬意を表しつつ自然発生的に生まれたものであり、「反ブラックホール型のエネルギー発生源・震源地」である。



「無鄰館」中庭のハーブ園



ハーブ園に面する「ガーデンテラス」

おわりに

まちづくりにおいては「無」が大切である、というのが本書の結論であるが、その結論は、「はじめに」でも述べたように、論理的なものではなく感覚的なものである（もちろん「無」は「不在」を意味しない。ものごとがそこにあるか否かを考える有無の二分法はすべての分析的思考の出発点であろうから）。「無」とは何か、ということを考えることは重要であるが、それを考えすぎて悟ってしまえばまちづくりはできなくなるであろう（一般に、過度の理論化は形而上学に陥るに違いない）。

本書でこれ以上のことを述べるのは蛇足というものであるが、一言だけ付け加えるならば、まちづくりにおいては「ただそこにある」というものが大切であるように感じられる。「ただそこにある」ということは、すなわち「巧まない」ということであり、「主張しない」ということである。「主張しない」を主張するとはどういうことか。これもあまり考えない方がよいように思われる。20世紀を代表する経済哲学者 F.A.ハイエクが、人間の文明における個人の理性の貢献を過大評価する設計主義的合理主義（constructivist rationalism）を「隷属への道」と批判したことを想起するのは、無駄ではあるまい。

政策論で言えば、細々した基準はあまり設けない方がよい、ということはいえそうである。まちは現場でつくるものである。机上で生み出された制度が事前に方向を細々と決めるとするのはきわめて不適切であると、感じられる。もっとも、ここであえてそういうことを言わなくても、現実の政策は徐々にそういう方向に向かっている。とにかくざっくりとやる方がいい。そんな感じがする。